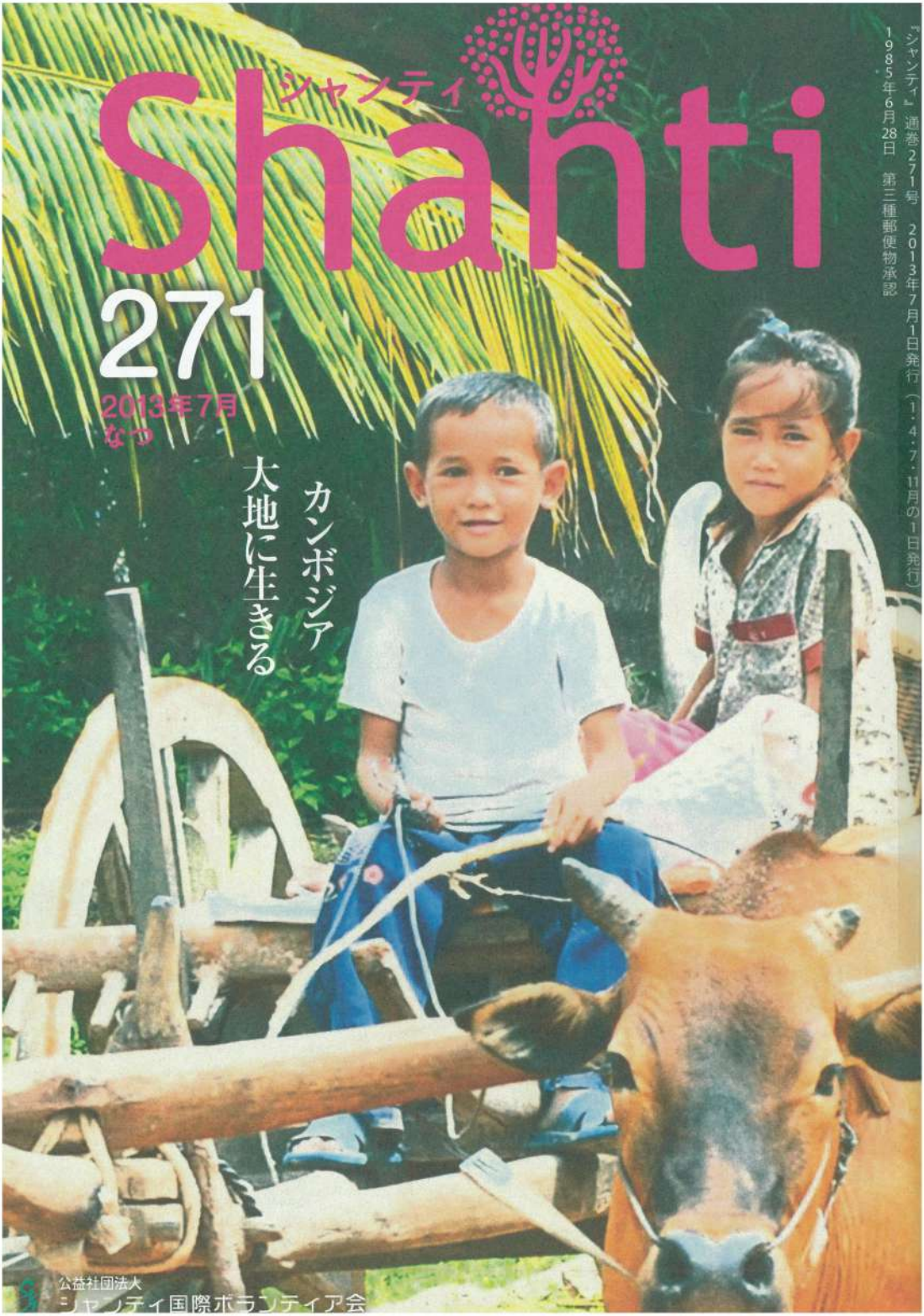
シャンティ Shanti

271

2013年7月
なつ

カンボジア
大地に生きる



『シャンティ』通巻271号　2013年7月1日発行（1・4・7・11月の1日発行）
1985年6月28日　第三種郵便物承認

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

2013年は、日本とカンボジアの外交関係が樹立されてから60年目の節目の年にあたり、「日本カンボジア友好60周年」が祝われています。

江戸時代初めは朱印船が行き交い、鎖国になるまで貿易がおこなわれていた日本とカンボジア。日本人村が二カ所あり、カンボジアに住む日本人がいた歴史を聞くと、いっそう身近に感じられますね。当時、アンコールワットを祇園精舎と思って、参詣した日本人が書いた江戸時代の墨書も残っています。

地平線まで田んぼが広がるカンボジアの農村は、緑がまぶしい雨季を迎えています。

Index

シャンティ 271号 目次

4 **定点観測：アジアから**
カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
アフガニスタン／岩手／気仙沼／山元

11 **特集 カンボジア 大地に生きる**
大好きなわたしの村／わたしの村のここがモンダイ（農村生活の現実）
SVAが村で取り組む2つのこと／私たちの決意／ブックガイド

21 **世界の絵本を読んでみよう**
創作絵本「みんなでひろおう！」カンボジア

22 **シャンティな人たち**
岩崎輝明さん（株式会社玄米酵素 代表取締役会長）

24 **カンボジアの仏教を訪ねるツアーへの誘い**

26 **ミャンマー（ビルマ）難民キャンプを訪ねるスタディーツアー**

27 **スタッフの昼ごはん** ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所

28 **今期のSVA役員紹介**

30 **日本しゃんてぃな旅** 慶林寺

31 **おしらせ／編集後記**

32 **道** 清掃の大切さを呼びかけた思い出 渡辺恵司

雨季になって水位が上がった用水路で飼い牛を洗う親子

彼が生きた証とともに

カンボジア **Cambodia**

報告：山本英里（カンボジア事務所）

電話の向こうの震える声で告げられた訃報が信じられず、えっ？と何度も聞き返していました。一度会えば必ず相手の名前を憶え、誰にでも気さくに「調子はどう？」と声をかける彼の笑顔が目に浮かびます。またね、といって別れたのはたった2カ月前。

ホン・シム氏（享年50歳・写真中央）は、1987年に教育省に入職し、教育省管轄の印刷業務や教育省内の書物管理業務を経て、2008年にプノンペン市内のフンセン図書館の副館長に就任しました。図書や書物が大好きで、いつも何か調べものをしていた彼にとって、まさに天職、水を得た魚のようにカンボジアの図書館発展にむけて、国内を奔走しました。

SVAを含む複数の団体の経験値をまとめ上げた、カンボジアで初の「小学校図書館スタンダード」の制定の背景には、彼の並大抵ならぬ努力がありました。彼の生きた証しがつまった図書館。いろいろな人の思いが詰まった図書館の発展に向けて、私たちはまた前を向いて精進していきます。

「小さなストーリーテラー」を育てたい

報告：竹谷麻莉子（ラオス事務所）

ラオス **Laos**

首都ヴィエンチャン、中心地から1時間ほどの場所にあるノンケーン小学校。読書推進を担当しているブンロム先生（写真）が読み聞かせを始めると、子どもたちは自然と物語の中に引きこまれていきます。

「以前勤めていた小学校でも図書室の担当だったため、絵本や図書の重要性については理解していました。しかし具体的に、どのように読み聞かせをすれば、もっと子どもたちに絵本に関心をもってもらえるか、試行錯誤の日々でした。そんな中、SVAの研修や移動図書館活動を通して、声の強弱やリズム、表情の変化など、実践的な方法を学び、子どもたちの物語や絵本への関心が以前より高まりました」

ブンロム先生は今年の秋に退職します。31年間この小学校に勤務してきました。退職までの目標は、自分の技術と知識を、新任の先生だけでなく、子どもたちにも伝え、「小さなストーリーテラー」を育てること。「まだまだ読書推進担当として、やるべきことがある」と、嬉しそうに語ってくれました。

この町の歴史の一頁を開きたいと願い

岩手 **Japan**

報告：村中一欽（岩手事務所）

大槌町にある一頁堂書店は、私たちが活動を通じてお知り合いになった大切な書店のひとつです。店を経営する木村さんご夫妻は、津波でたくさんのかけがえのない命を失い、悲しみに耐えている今こそ「本」が必要と考え、開業を決意。

スタッフ全員が津波で家を、仕事を失った中での出発。書店経営の経験もありません。開店当日、「亡くなった方々に対して恥ずかしくないように、生きていることに、仕事ができることに感謝しながらがんばりましょう。そしてこの町の歴史の一頁を開きましょう」と挨拶されたそうです。

ご夫妻はいつも物腰柔らかく本当に謙虚です。目標は18年間この書店を続けること。震災に遭った0歳の子どもが高校を卒業するまで、だから18年。

「必ずよい大槌町になると信じて、地元の書店として毎日頑張ってまいります」とご主人の薫さん。多くの方が、一頁堂書店の今日をそして明日を見守ってくださいますように。もちろん私たちも応援します。

気にかけてもらえると、張りあいがある

気仙沼 **Japan**

報告：里見容（気仙沼事務所）

4月、ワカメ収穫の最盛期を迎えた蔵内漁港は活気を取り戻して賑やかです。日の出から日没まで、毎日ワカメの作業。

及川敏さんは、蔵内浜の漁師たちが協業して養殖漁業を営む「蔵内之芽組」の一人。港で唯一残った船「寛洋丸」の船主です。

震災から2年過ぎましたが、漁師を再開する人は少なく、浜に20人ほどいた漁師もまだ6人。最近、蔵内之芽組には若い後継者ができ、皆、喜んでいます。

「もともとは閉鎖的な土地で観光客も少なかった。震災後、多くの人がボランティアに来てくれた。一人で何でもやっていたが、震災があって人に生かされていることに気づいた。そこが一番大きい変化」といいます。

蔵内の状況も変わってきているよう。「世の中から段々と忘れられてしまうんじゃないか。昨年は団体が来ていたが、今年は少なかった。気にかけてもらえると張りあいがある。まだまだ始まったところだから」。ワカメの収穫は5月いっぱい続きます。

「自分は福島で産まれて、育って」仮設を支える支援員

山元 **Japan**

報告：熊島好一（山元事務所）

「みんな、本屋さん来たよ。借りっせよ～」仮設団地に少しダミ声で大きな声が響きます。声の主、荒木さんは南相馬市で約350戸ある仮設団地を担当する支援員です。住民の相談、行政のビラの配布と、西へ東へ自転車で駆け回っています。

荒木さん自身も津波でご近所や親戚を亡くされています。「自分は福島で産まれて、育って、嫁いで。同じ福島県人、私が仮設の人たちの役に立てるなら、それでいいべした」そのような想いから、支援員に応募されたそうです。

「みんな、なんでも喜んでやってけっから、ほんと助かってる。私は、ただただ、みんなにお願いしてるだけ」荒木さんの周りには笑顔が絶えません。「今度、編み物と折り紙の本、持ってきて！ばあちゃんたちに教えっから！」はい、次回お持ちします。

利用者さんへの声かけ、おはなし、訪問日を住民へ連絡していただくなど、荒木さんには、大変お世話になっています。これからも共に進んで行きましょう。

特集

カンボジア cambodia 大地に生きる

ビルの谷間、渋滞をぬって走るバイクにひやひやしながらプノンペンの町を出ると、直に国道はまっすぐになり田園の中を走ります。地平線まで続く田んぼは、水におおわれ、川との境がわからなくなっています。牛や水牛がのんびりと歩いています。木の上にはサギの姿も見えます。森、川、たまに見える低くなだらかな山。農村の景色は見飽きることはありません。

半日ほど走ったでしょうか。国道から脇道へ入ると、車はガタガタ揺れはじめました。雨でぬかるんだ道が固まって、でこぼこになっています。樹木が日陰をつくる道をいくと、もうすぐあの村に到着です。

大好きなわたしの村

森
森に行けば野菜や薪など生活に必要なものはなんでも手に入る。釣餌のシロアリも採れますよ。

お寺
正月や水祭りには、みなでお寺に集まって伝統的な音楽やゲームを楽しみます。日頃からいろいろな行事が開かれています。

祖先伝来の土地を守る幸せ
戦時中には他の村に住まわされましたが、やっぱり生まれ故郷が一番。戦後に帰ってきました。

村人同士の信頼
犯罪が少なく、心穏やか。村人はみなあたたかく、伝統を守って暮らしています。

家族の絆
家族や親戚がいれば、大変なときに助けあえる。みな近くに住んでいます。

田んぼで米を育てる
贅沢な暮らしはできませんが、この村で農家をして、家族の食べるお米を自分たちで育てていることに誇りをもっています。

井戸
この村は土の質がよく、井戸の水も豊富でおいしい。

工芸
この村の名産はロムチェイの編み物。自然の恵みがあふれています。

分かちあい
村人は正直者のいい人ばかり。いろいろ買わなくても、必要なものはみんなで分け合うことができます。

スタッフが語る

村の暮らしのよいところ

● カンボジア人が最も大切に思っているのは家族と過ごす時間です。都会のように外に働きに出ず、1日のほとんどを家族で過ごせるのは幸せなことなのです。そして、先祖代々同じ土地で生きられるということ。先祖が守ってきた土地を耕すことに誇りを感じ、先祖の眠るお寺にお祈りにいき、いずれは自分もそこに眠るという安心感は、格別の魅力です。
急かされることなく、自然に囲まれながらゆったりとした時間の中で人生を楽しむことができる穏やかな環境。その幸せがあるので村から出たくない。農村に住むカンボジア人の心情だと思います。(ヴィスナ)

わたしの村のここがモンダイ

Q 生計はどのようにたてていますか

雨季には米農家。乾季には魚をとったり、鶏を育てています。乾季の空き時間には、漁の網を編んで売ってもいます。でもこれだけでは生活が厳しいので、子ども5人のうち2人がタイに出稼ぎに行ってもらっています。

雨季は米農家、乾季には村で洗濯、掃除などをして稼いでいます。また、乾季にはシロアリなど、森から採れるものを売っています。子どもは7人いますが、4人がタイに出稼ぎに出ています。夫は一日中酔っぱらっています。

雨季には農業、乾季には駄菓子などの売店をしています。昔はタイに出稼ぎに行っていましたが、大変だったのでもう出稼ぎには行きたくありません。

シロアリの卵をエサに魚つり

スタッフが語る

農村生活の現実

● かんがい農業ができるところは少なく天水頼みのため、収穫は雨季一回のみ、生産性は高くありません。農業だけで食べていける農家は少なく、乾季には多くの農家が出稼ぎに行きます。

● TV広告の影響で若者はバイクや家電製品などに憧れを持っています。
誰かが新しい家電製品を買ったりすると、周囲も同じものがほしくなってくるのです。
親世代は、昔ながらの生活を村で送りたいと考える人がほとんどですが、若者の出稼ぎには物質主義的傾向が強くなりました。

写真：瀬戸正夫

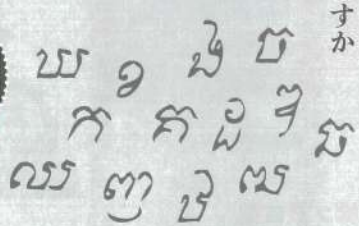
Q 文字が読めなくて困ったことはありますか

豚を売るとき、秤の目盛の数字が読めないため、仲買人に安くだまし取られてしまった。

昔、病院に行くため都市に行きましたが、字が読めなくて、どれが病院かわかりませんでした。

村の外は怖くて出られません。看板が読めないのでどこに何があるのかさっぱりわからないからです。

タイでの出稼ぎでは、まともな仕事に就けませんでした。読み書きできないだけで面接を落とされました。過酷な肉体労働しか見つからず、生活・労働環境が辛かったので帰ってきました。もう二度と出稼ぎに行きたくないです。



スタッフが語る

識字の現実

● 読み書きができないと、農業か低収入の肉体労働以外の職を得るのが難しくなります。
非識字者は、社会生活を営む上で最低限必要だと思われる就職情報、行政情報などの各種情報へのアクセスが不利になり、貧困から抜け出すことがいっそう難しくなります。
生活を向上しようにも、非識字者が得られる情報は、主に先祖代々言い伝えられてきた知識や知恵に限られてしまい、このことが就職市場で彼ら・彼女らを不利にしています。

写真：瀬戸正夫

農業で自活できない

農村では、土地を売ってしまい持っていないか、農地が小さいため充分な収量が得られない農民がほとんどです。

かんがい施設がないため乾季には水不足になり、肥料の正しいやり方や家庭菜園など農業の知識も欠けているため、生産性も低いのです。一部の農家は農業生産性をあげようとする努力・自主性を持っていますが、充分な成果はでていません。市場が遠いため農産物をブローカーに安く買い叩かれるのも問題です。

企業のおこなうゴム畑などの大規模農業は、この問題に拍車をかけています。政府は、大規模農業は投資を活発にし、地方に雇用を創出、貧困削減につながって、国家全体に利益をもたらすと考えています。しかし、実際のところ大規模農場は住民の生活のよりどころである森を破壊するなど、地域にはマイナスに作用しています。

（ヴィスナ）

貧困の悪循環

読み書きができないと、貧困の悪循環に陥りやすいです。

これは、読み書きができない→安定した職に就けない→収入が少ない、安定しない→教育が受けられない（自分も子ども）→読み書きができない……といった次の世代まで続くマイナスの連鎖です。

UNESCO「識字地図」（識字状況を示した地図）とJICAの「貧困地図」（貧困状況を示す）を見比べると、識字と貧困に相関関係があることがわかります。

地方の農村でプロジェクトをしている身としても、識字と貧困の関係を強く感じます。貧しい家庭で聞くと、読み書きができないと答える人の割合が多くなるからです。

大人も子どもも読み書きを学ぶことは、この悪循環を断ち切るスタートになりえます。

（ヴィチェット）

SVAが村で取り組む2つのこと

なぜ図書館に行きますか

住民参加による学校図書館運営事業

教員だけではなく住民にも学校図書館の運営に関わってもらうプロジェクト。農業関係の本を準備するなど、住民の生活改善にも役立つ開かれた図書館をめざす。

健康・保健、教育、宗教などの本を読んでいます。自分の生活を良くしたいからです。

図書館に来る大人は少ないですが、私は農業や畜産の本を読みに来ます。

農業関係の本

エプロンシアター

スタッフが語る

図書館と村

● この事業を始める前は、村人に学校図書室の重要さを理解してもらうのは大変でした。しかし、今は違います。この事業では、一世帯に本一冊分のカンパを募っていますが、無事に集まっており、村人たちが図書室の重要性を理解してくれている何よりの証拠です。

大人が読み書きができなくても、子どもたちは図書室から借りてきた本を、家で親に読んで聞かせています。親は、子どもが日増しに本を上手に読めるようになるのに驚かされ、教育の効果を肌で感じてるのです。

コミュニティラーニングセンター(CLC)に期待することは

図書館活動を中心としたコミュニティ・ラーニング・センター(CLC)事業

子どもから大人まで通える学習センター。年代にあった本を用意し、大人向けの読書教材も開発して生活に役立つ情報を提供する。

CLCの図書館で農業や保健に関する本が読みたいです。この村では、安全な飲み水の作り方について理解が乏しい人が多いので、しっかり学んで、みんなに教えてあげたい。

文字の読み書き、計算をできるようになり、ライフスキルも学びたいです。そして、自分でお金を稼げるようになって、自分の人生を選べるようになりたいです。

※ライフスキル
生活向上に役立つ能力

スタッフが語る

意識の変化

● 最大の変化は、自らの人生を考えて選びとっていく「道を切り拓く力」が養われることです。

現在、CLCの対象地域になる貧困村において、住民は一日一日を生きることに精一杯で、「人生こんなもの、なるようになるさ」と納得、もしくは諦めて生きている人たちが少なくありません。しかし、村にCLCをつくり、識字教室で読み書き計算を学んだり、図書館活動でライフスキル等の講義を受けることによって、住民は少しずつ自分や家族の将来を思い描き、理想に向けて計画的に行動していく力を養っていけます。

識字は「自己変革」だけでなく、「社会変革」の礎でもあります。CLCで学び、自らの人生に対して主体的に行動をするようになった人たちが増えていくと、今度は地域レベルで、その村の発展に向けて主体的に関わってくれると信じています。

写真:瀬戸正夫

農村の貧困が生み出す問題

農村部の住民が抱える貧困問題は、生活全体へ深刻な影響を及ぼしています。教育レベルの低さ、保健衛生状態の悪さ、就職や就学など人生のあらゆるチャンスと、そのための知識や資金が手元にないのは、貧困に起因しているのです。

小学校が近くにない、あっても文具や制服などの費用が出せないため、子どもを学校に行かせないで、家事の手伝いをさせたり、出稼ぎに出す家庭も珍しくありません。

教育を得られない結果、非識字者が得られる情報は、主に先祖代々言い伝えられてきた知識や知恵に限られてしまい、新しい知識や情報、たとえば安全な飲み水や、栄養豊富な食品に関する知識を得られないため、保健衛生環境は改善しません。

家事・子育てを担う女性が保健衛生の知識をもつことも、家族の健康改善に役立ちますが、現状は教育の機会を得ることが難しいです。意外かもしれませんが、農村部では離婚が珍しくなく、都市部以上に多くのシングルマザーがいます。家族計画への理解が低いので、早婚や望まない妊娠などで、女性が社会の中で力を発揮できていない現実があります。

また、カンボジアには社会保障の制度がないため、家族に病人がいたり、年寄りがいる場合、家族や親族がこの人たちを支えなければなりません。そのため、家族の誰かを出稼ぎに送る必要が出てきます。

私は、教育こそがこのような悪循環を断つカギだと思います。農村部の住民は、食料や飲み水以上に教育に飢え、必要としています。ニーペック集合村での事前調査では、78%の住民が「読み書きができないことで不便や不安を感じた」と答えました。大人が学べる場所として、CLCや学校図書室を整備することが重要になっています。

(ヴィチェット)

私たちの決意

事業を進めるのに大切なのは村人とのコミュニケーション
ノンフォーマル教育課　ヴィチェットスタッフが家庭を訪ねて話を聞きます
（コンポントム州）

SVAがカンボジア難民への支援を手探りで開始して約30年、カンボジア国内に事務所を構えて20年経過した今、私たちは、新たな挑戦に向かっていかなければならないと感じています。

村ののどかな風景、ゆっくりとした時間、笑顔の絶えない村人、そんなカンボジアの農村は訪れる人々を癒します。

「今のままでいいのではないか」

そんな声を聞くこともあります。発展を遂げた私たちが失ったものがカンボジアにはあるのかもしれません。しかし、そこには見えない現実の厳しさがあります。下痢や感染症など、薬や知識さえあれば防げるような、「なぜ、こんなことで」というようなことで幼い子どもが命を落とします。教育を受けること、知ること、そして貧しさから抜け出すこと、そういった権利をもち、選択できる人生を歩むことは全ての人々に公平にあるべきです。

長く続いた内戦の傷跡は、都市部が目まぐるしい復興を遂げている今でもカンボジアに大きくのしかかっています。小学校の就学率が約96%を達成しているものの、地方においてはいまだに半数近くの子どもが卒業できず、中学校、高校への道のりは厳しいものになっています。

都市部の急速の発展とは裏腹に、地方農村部では、せっかく小学校で覚えた読み書きも忘れてしまい、村人の二人に一人は読み書きができない村もあります。貧困から抜け出したい、明日を心配せずに眠りにつきたい、といった切実な思いがあります。自分たちの生活を改善するために、できることから始めていこう、図書館やコミュニティ・ラーニング・センターは、そんな一歩を踏み出すきっかけになるような場でありたいと思っています。目を輝かせ、先生になりたい、医者になりたい、といっていた子どもたちが、思春期を迎え、夢や希望を失いつつあります。貧しさから、出稼ぎに出たり、日雇いに出たり、日々過酷な農作業に従事したり、そんな日々が過ぎていきます。

せっかく取り戻した平和な国や社会、これからの世代の若者が貧しさに追われ、どのような国にしていきたいかと、未来を夢見ることができない現状に懸念を抱いています。

より困難な生活を余儀なくされる人々のそばで、本当の平和を取り戻すまで寄り添っていきたい、という思いから、貧困度が高く、地雷原に近年まで苦しめられたバッタンバン州、シェムリアップ州に事務所を移転することになりました。過去にバッタンバン州に職業訓練所を、またバンテイミンチェイ州、シェムリアップ州に事業事務所を期間を区切って開設したことはありました。しかし、1992年の開設以来、プノンペンにおいていた常設事務所を地方へ移転することは大きな挑戦です。

私たちは、図書館、本といったもの無限なる可能性を広げていきたいと思っています。様々な形、役割があっていいと思います。図書館はもっと身近に人々に寄り添っていくことができると思います。

そして、共に学び続けることで、小さな一歩を踏み出していく、そんなお手伝いを私たちは、カンボジアの農村部で続けていきたいと願っています。

（カンボジア事務所長　山本英里）

❶ 高床式の床下で手作業で編んでいくロムチェイ
❷ 編み上がったロムチェイ
❸ ユップ・ピンさんが乾季に商う売店
❹ オン・トムさんの畑を見せてもらった
❺ 校長先生の自宅に伺ったフォーマル教育課　ヴィスナスタッフ

みんなでひろおう!

世界の絵本を読んでみよう③
創作絵本　カンボジア

1

兄弟の小鳥が
男の子にであいました。
「いっしょにゴミを
ひろってほしいな」
という男の子に
「ゴミをひろわなかったら
どうなるの?」と
小鳥がききました。

2

「土がよごれて草がはえなくなる。
ゴミはみずうみや川にもながれて、
魚、エビ、カニをころすんだ」
小鳥の兄弟はぶるぶるとふるえました。

3

「ぶんべつしてゴミばこに
すてないといけないんだね」
小鳥の兄弟と男の子は
いっしょにゴミひろいを
つづけました。

カンボジアをもっと知るためのブックガイド

BOOK GUIDE : ABOUT CAMBODIA

人はなぜ人を殺したのか ポル・ポト派、語る

舟越 美夏／毎日新聞社／ 2013年

数百万人ともいわれる国民を飢餓や長時間労働による病気、虐殺で死に追いやったのはなぜか。共同通信社の記者である著者が、プノンペン支局駐在中の2001年からポル・ポト派の元幹部と、その親友や妻など身近な人へインタビューをおこなった。それぞれの立場から「あの時代」を語る。

地雷に浮かぶ国カンボジア

P・デービス著　名倉睦生訳
朝日新聞社／ 1995年★

訳者がカンボジアに駐在していたとき、小学校の廊下に脱ぎ捨てられていた地雷被害者の血に染まったズボン。内戦時に埋設された大量の地雷が、戦後も人びとの生活に大きな脅威となっている。バッタンバン州での地雷に脅かされる住民の暮らし、その現状への方策をリポート。

微笑みの祈り

マハ・ゴサナンダ著　馬籠久美子・野田真里訳／春秋社／ 1997年★

社会派仏教のリーダー格であるマハ・コサナンダ師の法話集。師はサケオ、カオイダンなどすべての難民キャンプに寺院を建立、仏法を説き、内戦後の復興に尽くした。SVAも図書館活動や仏教書の復興を通してともに活動していた。

カンボジア戦記

冨山泰著／中公新書／ 1992年

ポル・ポト派の大虐殺から和平に至る道をめぐり、大国の思惑に翻弄されたカンボジア。1980年代時事通信社バンコク特派員を務めた著者が、外交の現場を生き生きと描く。ベトナムや中国、ソ連など周辺国との関係を詳しく知りたい方へ。

カンボジアを知るための62章

上田広美・岡田知子編著
明石書店／ 2011年

言語、文化、自然、歴史から、映画など現代の芸術まで説いた1冊。「グローバル化への道」「進む日本企業の投資」など、社会の移り変わりについても章をさいており、入門書として最適。

新版 現代カンボジア風土記

今川幸雄著／連合出版／ 2006年

著者は1991～96年までカンボジア大使。1957年から8年間、在外研修と大使館勤務の間にプノンペン法科大学に学び、休日にはアンコール遺跡群へ通い見聞を深めていた。アンコール遺跡、人と風土、歴史についてまとめている。叙事詩「ラーマーヤナ物語」も資料に収録。

★絶版。SVA東京事務所に在庫あり。

シャンティな人たち

शान्ति

vol. 62

岩崎輝明 いわさき てるあき

株式会社玄米酵素
代表取締役会長

小学校校庭に記念植樹する岩崎輝明代表取締役会長

校舎贈呈式でテープカット

村人から感謝の気持ちを贈られる

一食をアジアの子どもたちとわけあう

「日本は戦後、多くの国から援助をもらい、復興した。ぼくは、教育支援はそのときのお返しと考えている。自分たちだけがよい生活をして良しといるわけにはいかない」。張りのある声で語るのは、岩崎輝明さん。

健康食品の販売、正しい食生活を提唱する玄米酵素グループでは、1カ月に1食分を節約して、500円を寄付し、アジアの恵まれない子供たちへの教育環境整備に役立てようという「愛の一食運動」を2002年から展開しています。販売店に呼びかけて集まった浄財と同額を会社が積み立てて、カンボジアの学校建設、スペシャルオリンピックス世界大会の支援、東日本大震災の被災者への支援にあてています。

その運動を呼びかけたのが、創立者であり会長の岩崎さん。社員の規範になるように、率先して毎日昼食を抜いて、その分を積み立て、寄付しています。

会社設立30周年にあたり、社会に貢献できることをと考えていた岩崎さんは、講演でカンボジアの教育の窮状を聴き、支援を決めました。講師からSVAを紹介されて、学校建設支援をいただき、2002年、校舎の贈呈式で初めてカンボジアを訪れました。当初は1校で終わりにしようと考えていた岩崎さんでしたが、現地で支援の必要性を痛感。10校を目指して続けることを決意したといいます。

68歳。自宅から玄米酵素の製造販売を始めた岩崎さん。会社経営を続けていく中で、人材の大切さを実感しています。そこから、「国を作るのは〝人〟。教育がなにより大切」と考え、校舎設備などのハード面だけではなく、学校運営などのソフト面が大切と、図書館員の研修も助けています。事業での苦労が多かったからこそ、人の情けのありがたさを感じ、「だからこそ、学校を使ってもらって、ありがとうという気持ちでいます」

「カンボジアの子どもは貧しい目をしていない。瞳の輝きが印象的だった」とカンボジアの将来にも期待を寄せています。

（広報課　清野陽子）

カンボジアのお坊さんからメッセージが届きました

日本の皆さん、こんにちは！ムニー・ヴァンサヴェートと申します。バッタンバン州のノリア寺の僧侶で、「Hope of Children（HoC）」というNGOの代表をつとめております。

私は1992年からノリア寺の境内で孤児院やエイズ患者支援、人権教育、地域の貧困層を対象に職業訓練活動などを行ってきたのですが、場所が手狭になっていました。そんな時、活動を理解してくれている村人からの土地の寄進もあって、2011年9月にこの地にセンターを建設しました。現在4歳から17歳までの孤児49人が、センターの水田で米を作り、畑では有機肥料を使った野菜栽培をして自活しながら学校に通っています。また、周りの村の貧困家庭を対象にクラフト（手工芸品）づくりの職業訓練も行っています。

カンボジアの人々は、日本の皆さんがカンボジアだけでなく世界の困難な人々に対して支援していることを知っています。そんな日本の皆さんが大災害に見舞われたことを知って、私たちはこのセンターに集まって慰霊祭を行いました。このセンターは今でも多くの日本の方々からご支援をいただいています。大きな試練の中にありながら、なお他の国の人々を助けようとされる日本の皆さん。その大きな慈悲の心を持っておられる皆さんであれば、きっとこの困難を乗り越えてゆかれるであろうと信じております。

ご自分の寺院も被災されながら、仏教僧として、困難の中にある人々に支援の手を差し伸べておられる皆さんに大変感銘を受けております。津波の被害に遭い困難と闘っている人々を支えることは仏教を実践することにほかなりません。

日本の皆さんが11月に訪問してくださるとのこと、大歓迎です。ぜひ、私たちの活動をご覧になってください。カンボジアも日本も仏教国です。お互いに理解し合い、協力し合って、平和な社会をつくってゆきましょう。

（取材・翻訳／カンボジア事務所　手束耕治）

職業訓練校の室内

事務所の中心には仏像が

水田の向こうに男子寮

HoCの事務所

ムニー・ヴァンサヴェート和尚

日本の皆さん、カンボジアのお寺においでください！

「カンボジアの仏教を訪ねるツアー」地域活性化のための対話と交流」に、ぜひご参加を！

ムニー師が所属するノリア寺のある地域は、仏教徒、キリスト教徒、そしてイスラム教徒が混在する地域です。1992年よりムニー師は宗教を超えて、各宗教者と協力して地域の孤児、エイズ患者の支援などの活動を行ってきました。師の活動は今ではバッタンバン州を統括する僧侶たちの集団、宗教省、宗教局も評価するところになっています。このような僧侶の存在を知るにつけ、東南アジアの仏教は小乗仏教、などという先入観は吹き飛んで、むしろ彼らこそ大乗仏教徒ではないかと思えてまいります。

この秋、右記の要領で、カンボジアを訪ね、このような僧侶の皆さんと交流するツアー「カンボジアの仏教を訪ねるツアー」（仮称）を予定しています。このムニー師とお会いし、その活動を見学する予定にもなっています。どうか、奮ってご参加ください。（宗教法人担当・大曽俊幸）

カンボジアの仏教を訪ねるツアー

11月24日（日）～30日（土）5泊7日

訪問地：カンボジア・バッタンバン州、他

地元寺院の活動見学、寺院関係者と懇談ポルポト時代の史跡視察、SVA活動地訪問、アンコールワット観光など

問い合わせ：詳細については東京事務所・神野まで。

これがワタシの
チカラになる！

スタッフの昼ごはん

ミャンマー（ビルマ）
難民事業事務所の職員さん、
今日のお昼はなんですか？

ふだんは市場でご飯を買ってきますが、季節の食材があるときはみんなで料理します。事務所の台所で日本人職員、現地職員が一緒に食べることが多いです。タイ料理、カレン料理で欠かせないのは唐辛子。特にカレン族の人びとは辛い料理が好きなので、唐辛子のペーストは必ず食卓にあがります。

私は難民キャンプの図書館で読み聞かせに使う教材や道具の作成、絵本の翻訳、翻訳シールの編集などを担当しています。難民キャンプで、私のつくった教材がコミュニティの子どもたちに役立っているのを見ると、とても嬉しいです。（トー談）

タイ語 อร่อยมาก アロイ・マーク（おいしいよ）

カレン語 ́ɔ́ɔ́ɔ́ɔ́ɔ́ɔ́ ɔ́ɔ́ɔ́ɔ́ ɔ́ɔ́ɔ́ɔ́

今期の役員から皆さまへ

2013年度

3月23日の定時社員総会において、理事20人監事2人が選出されました。
2013年4月から2015年3月まで2年間の任期で、SVAの運営にあたります。

会長
若林恭英（わかばやし・きょうえい）
長野県・安楽寺住職
「平和は、唱えているだけでは実現しません。具体的な行動が必要です。より有効な教育支援は何かを考え、行動していきます」

副会長
神津佳予子（こうづ・かよこ）
有限会社ケイアンドアイ代表取締役社長
「すべての子どもたちが、生きるってこんなに素晴らしいことなんだ！と実感できる世界になるように、微力ながら尽力いたします」

副会長
三部義道（さんべ・ぎどう）
山形県・松林寺住職
「見知らぬ人の痛みに痛みを感じる心が私たちにはあります。その心を言葉にし行動にする社会を広げていきましょう」

専務理事
茅野俊幸（ちの・しゅんこう）
長野県・瑞松寺住職　「先達が伝えた〝ボランティアは主役なのではなく、〈ヒト〉〈モノ〉〈コト〉を融合させる触媒であり、黒子であらねばならない〟という言葉を、自身の行動に引き当て、任にあたってまいりたいと思います」

常務理事（新任）
市川斉（いちかわ・ひとし）
SVA常勤役員　「職員から常勤役員なり、身が引き締まる思いです。〝熱い心と冷静な頭〟で活動し、現場の視点や原点を大切に、全力で取り組みます」

常務理事
秦辰也（はた・たつや）
近畿大学総合社会学部総合社会学科
社会・マスメディア系専攻教授
「SVAに参加して早30年。この間のアジア諸国の変化には凄まじいものを感じます。SVAの存在価値は何なのか？皆様と共に考えながら歩みたいと思います」

常務理事
早坂文明（はやさか・ぶんめい）
宮城県・徳本寺住職　「被災地に住む者として、復興の足音を響かせることができるよう力を尽くす。また復興の足音に耳を澄まし続けて、忘れないようにしたい」

理事（新任）
有馬嗣朗（ありま・しろう）
山口県・原江寺住職
「行には願いがなければならない。願いがあるから行ずる。誰もが願う社会とは。その社会作りとは。SVAはきっと作ります」

理事（新任）
磯辺康子（いそべ・やすこ）
神戸新聞社会部デスク兼編集委員
「SVAの皆さんとの出会いは、1995年の阪神・淡路大震災でした。多くの支援をいただいた神戸の者として、何かお役に立てれば幸いです」

理事（新任）
岡本真（おかもと・まこと）
アカデミック・リソース・ガイド編集者
「個人的に実施してきた被災した社会・文化施設の支援活動と、SVAの活動との連携を軸に幅広く活動していければと願っています」

理事
倉科利行（くらしな・りぎょう）
長野県・全久院住職　「東日本大震災復興支援、ビルマへの支援活動の開始など、SVAも新たな局面を迎えます。多くの学びをしながら、活動したく思います」

理事
神仁（じん・ひとし）
財団法人全国青少年教化協議会主幹
「微力ながら、アジアの子どもたちを始めとする困難な状況にあるすべての方々の幸福を実現するために、支援者の皆さまと共に歩んでまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。合掌」

理事
関尚士（せき・ひさし）
SVA事務局長　「30年の歩みから培われてきた智慧を、新たな発想のもとで取り組むこれからの試みに体現していくこと。共に創り出してければと思います」

理事
長浜洋二（ながはま・ようじ）
NPOマーケティング研究所代表
「2期目となりますが、SVA内で、確実にPDCAが回せるような意識改革と体制作りの支援に取り組んでいきたいと思います」

理事
永堀宏美（ながほり・ひろみ）
人財育成コンサルタント、早稲田大学教職研究科非常勤講師　「お母さん目線でSVAの活動をより広く分かり易く伝えるお手伝いを目指します。アジアの人材（財）育成は家庭の笑顔から」

理事
野村修一（のむら・しゅういち）
弁護士　「現場からの発想を踏まえた活動に。〝開発〟されてSVAに関わって20年。その活動を後方から、法的側面を中心に支援していきます」

理事
笛岡賢司（ふえおか・けんじ）
静岡県・龍谷寺住職
「JSRCからSVAへ／けもの道、再発見？／今年もスタディツアーにチャレンジ！／愚労軽塾」

理事
八木沢克昌（やぎさわ・かつまさ）
SVAアジア地域ディレクター
「JSRC時代も含めて、今年で33年目、ミッション、パッション、ドリーム（ミパド）をモットーに海外の現場から発信して行きたいと思います」

理事
渡辺恵司（わたなべ・けいじ）
ワタケイ紙器株式会社代表取締役会長、こうとう親子センター代表
理事　「活動開始から30年、今は救済支援から自立支援へ、信頼の輪を大きく育てましょう」

理事（新任）
渡邊智恵子（わたなべ・ちえこ）
株式会社アバンティ代表取締役
「20年前に故有馬さんとお会いして、初めて曹洞宗の国際ボランティアの活動を知りました。東北震災がご無沙汰いたしたこの長年の年月を縮めてくれました。きっと何か大きな力が働いていると感じています。私でなければできないことをしてまいります」

監事
青木利元（あおき・としゆき）
ボランティア活動国際研究会代表
「SVAの持続的な成長と発展を見守り、SVAがより安定した経営と多彩な人材が躍動する人間集団を実現出来るように後押ししたい。SVAがアジアにおける〝一隅を照らす〟存在であってほしいと願っています」

監事
増田和生（ますだ・かずお）
自治労大阪府本部特別執行委員
「SVAが海外、東北3県、東京事務所の全ての地で、リスクに強い活動体で在る様に、引き続き努めてまいりたいと思います」

日本しゃんてぃな旅

3 神奈川県大磯町 慶林寺（けいりんじ）

元首相吉田茂や文豪島崎藤村が邸をかまえた大磯の海岸から、立ち上がるように連なる山間の道を進み、慶林寺を訪ねました。農家が多い100世帯ほどの静かな虫窪集落には「湘南みかん」として知られるみかん畑が広がります。6月はあじさい、秋は彼岸花が群生し、野鳥や渡り鳥が見られ、最盛期にはカメラや望遠鏡の三脚が並ぶようになりました。

慶林寺の住職豊田素道（とよたそどう）さんは、昨年から曹洞宗神奈川県第一宗務所青年会（略称「かないち」）の会長を務めています。青年僧侶たちの交流を目的に作られた「かないち」では、10数年前からクラフト・エイドの販売でSVAにご協力いただいています。梅花流奉詠大会や寺院での販売を楽しみにしている檀家さんの顔を思い浮かべながらの注文。

夏休みの「子ども坐禅会」を寺院持ち回りで主催。地域の親たちからも頼りにされており、東日本大震災で被災した仙台市に継続的な支援と交流を続け、その活動は広がっています。

大磯港の食堂で相模湾の新鮮な海の幸を味わった後、富士山の偉容を望みながらの東海道そぞろ歩きは時間を忘れます。

■広報課　清野陽子

◉曹洞宗慶林寺
神奈川県大磯町虫窪

◉周辺の見どころ
旧吉田茂邸
旧島崎藤村邸
鷹取山（自然環境保全地域）
大磯ロングビーチ

◉アクセス
JR東海道線「大磯駅」下車。
車で20分（6km）。

SVAからのお知らせ

人事のお知らせ

●入職
加瀬貴……ラオス事務所 副所長（4月1日付）
菅磨里奈……海外事業課アフガニスタン事業担当（6月3日付）

●退職
大森篤史……広報課 契約スタッフ（4月30日付）

●異動
鈴木淳子……ラオス事務所スタッフから海外事業課 ラオス事業担当へ（5月1日付）
木村万里子……海外事業課 ラオス事業担当から緊急救援室長へ（5月1日付）
塚本真衣子……海外事業課 業務補佐から経理・総務課 総務担当へ（6月1日付）
河口尚子……経理・総務課 総務担当から国内事業課「絵本を届ける運動」担当へ（6月1日付）

お詫び

春号「BOOK GUIDE」に作者名の誤りがありましたので、下記の通り訂正いたします。

P.23『図書館の主』作者名
（誤）藤野ウミハル　→　（正）篠原ウミハル

関係者ならびに読者の皆さまにご迷惑をおかけしたことを、深くお詫び申し上げます。

「緊急救援室」の体制を強化

3.11以降、SVAは東日本大震災の被災者支援活動に注力するため、休眠していた海外での災害緊急支援の取り組みを再開するために、体制を整え直しました。3事務所体制となった東日本大震災の被災者支援活動を支え、また気候変動の影響から、ますます増えるであろう海外での災害緊急支援の実施に備えます。

被災者とご支援者・関係者をつなぐ役割において
1. 何事にも誠意をもって責任ある対応を行うこと
2. 密なコミュニケーションをはかり、現場の声を確実に届けること
3. インプット・アウトプットの工夫により活動の質を高めることを大切に取り組んでまいります。

（緊急救援室長　木村万里子）

編集後記

NHK番組「時論公論」で、国会で子どもの貧困対策法を作ろうという動きが本格化していることを伝えていました。日本の子どもの貧困率は増え続け、15.7%。主な要因は一人親家庭の増加、働く親の所得の減少です。他の先進国と大きく違う特徴は、親が働いているのに貧困に陥っている世帯の割合が高いとのこと。夏号では、カンボジアの農村の貧困問題についてまとめましたが、足元の日本の貧困のことも、きちんと見ていきたいです（清野陽子）

◎この番組のまとめはNHK解説委員室のホームページで読めます。「貧困の連鎖をくいとめよう！」
http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/156282.html

シャンティ　2013年夏 271号
2013年7月1日発行
発行人　若林恭英
発行所　公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233　FAX 03-5360-1220
WEB：http://www.sva.or.jp　E-Mail：info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724
編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞／イラスト　清原笑子
印刷　株式会社大川印刷　定価550円

©2013. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C009309
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

巻末言

道

清掃の大切さを呼びかけた思い出

理事　渡辺恵司

最初は何事だろうと見ていた生徒たちが次第に真似してゴミ拾いを始め、道路の向こう側までみるみるきれいになっていった。

「こんな散らかって不衛生な所に学校を支援する気にはなれません」

訪問した小学校で学校委員会との話し合いの最後にその一言を言って席を立った。

私が初めてカンボジアを訪問したのは1999年5月9日。子育てと仕事が一段落した58歳の時、元SVA理事笠原尚夫氏と無着成恭夫人のときさんにお供して行ったのがカンボジア支援の始まり。プノンペンの中心地は荒れた西洋風な街並み。雨期が始まって間もない路上には水たまりが出来、ゴミが目についた。

翌年、カンボジアに送るため、笠原氏の要請で夏物古着をコンテナー1台集めた。輸送費の支援もお願いしたところ、日本全国からのダンボールには規程より過額が同封されていて、輸送経費を引いても多くお金が残った。以降その方々の応援で学校支援出来るようになった。

1校目タケオ州プニーミアス小学校贈呈式の後、2校目の要請地カンポート州プランソバン小学校を訪問。そこは路上から校庭へ駄菓子の包紙やビニール、食べかす、皮。そこに水が溜まり悪臭が漂っていた。

1時間ほど校長をはじめ学校建設委員会の方々より学校、地域、教育の様子、校舎建設の必要性を聞かされた。が、「お断りいたします。ここの環境は悪すぎます」と言って校庭へ出て道路に向かってゴミを拾い始めた。最初は何事だろうと見ていた生徒たちが次第に真似してゴミ拾いを始め、道路の向こう側までみるみるきれいになっていった。

再び教室へ戻り、「清掃することは、衛生、健康、労働、共働、思いやり等々を養う」と必要性と効果を訴え、「常に皆できれいにして行く事をお約束して下さるなら建設を支援します」と伝えて帰路に就いた。

帰国後間もなく、コミュニティ清掃委員会結成を知らせるさわやかな決意と約束のお便りがとどいた。

「周辺4カ村の村長が小学校でミーティングを行い村全体で清掃運動に取り組む事を決定しました。定期的に開始した」。

それなら、と贈呈を決定。翌年7月きれいに清掃され、両国の国旗がはためく下で感動的な贈呈式が行われた。

（ワタケイ紙器（株）代表取締役会長）